

様式3

技術開発完了報告

青森営林局 森林技術センター

課 題 名	ヒバ択伐林分における葉枯らし乾燥材に関する 実行・調査				
指示・自主 区 分	局自主	開発 期間	平成 7～9	担 当	森林技術センター
目 標	葉枯らし実行に関して明確になっていない「伐倒方向」「成長応力の緩和」「材色の変化」について、今後さらに需要が拡大されるであろう乾燥材を生産する過程において、どのような影響があるか実行・調査し、併せて追跡調査を行うものである。				
結 果	生立木の含水率の状況と、葉枯らし処理期間における含水率の推移について把握することができた。また、アンケート調査からは葉枯らし材への関心が高まりつつあるのが確認された。		技術開発経費内訳		
			〈人工〉 千円		
		物件費	0		
		役務費			
		人件費			
		基 職 〈120〉			
		その他			
		合 計 〈120〉	0		
開発経過と調査内容 開発経過 1 平成7年4月 資料の収集及び分析 2 平成7年6月～平成8年7月 生立木の含水率調査 3 平成7年10月～平成8年10月 伐倒後の含水率調査 4 平成9年11月～平成10年3月 製材所へのアンケート調査					

調査内容

1. 生立木の含水率調査
2. 伐倒後の含水率調査
3. 集材工程の把握
4. 製材所へのアンケート調査

評価及び普及指導

(評価)

生立木における含水率及び処理期間による含水率推移の調査を行い、併せて心材部・辺材部・年輪幅・地上高との関係について究明し、追跡調査を行った。

(普及)

1. 青森営林局業務研究発表会 平成7年度

技術開発課題完了報告論文

課題 ヒバ択伐林分における葉がらし乾燥材に関する実行・調査

青森営林局自主課題 自平成7年～平成9年

担当 森林技術センター

はじめに

建築業における部材のプレイカット化、流通期間、建築工期の短縮により、針葉樹乾燥材に対する消費者ニーズが急速に高まってきているなか、葉がらし乾燥材が再び脚光を浴びてきている。

主要樹種であるヒバの葉がらし乾燥については、スギ材ほど含水率が高くないこと、主に択伐により生産されている等の理由から、一部の署で実行されているにすぎない状況にある。そこで今回ヒバの販路拡大と付加価値向上への可能性を探るため、ヒバ択伐作業における葉がらし乾燥について継続して調査した結果、初期の目標とする成果を得たので本年度をもってこの課題を終了することとし、完了報告とするものである。

なお、生立木における含水率および処理期間による含水率推移については、平成7年度青森営林局業務研究発表収録に記載されているのでここでは省略することとし、アンケート調査結果を報告する。

1. ヒバ葉がらし材の追跡調査

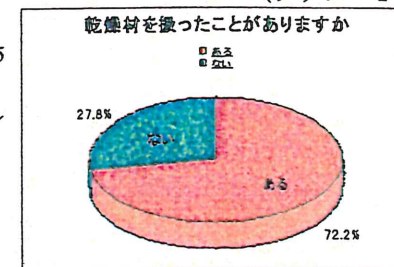
(1) 調査方法

地元製材業者 18 社を直接訪問し、アンケート調査に協力を願った。

(2) 調査内容及び結果

(ア) 設問-1 葉枯材を扱ったことがありますか。

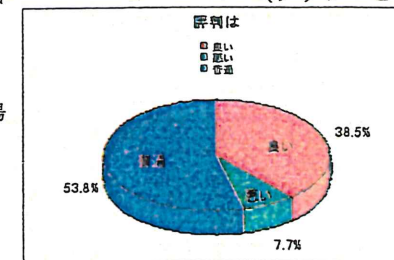
(グラフー1)



「ある」が 13 社の 72 % で、「ない」が 5 社の 28 % であった。「ある」と回答した中で、葉がらし材の評判は「よい」が 5 社の 38 %、「普通」が 7 社の 54 %、「悪い」が 1 社の 8 % であり、評判は悪

くはないが普通よりやや上といった具合である。

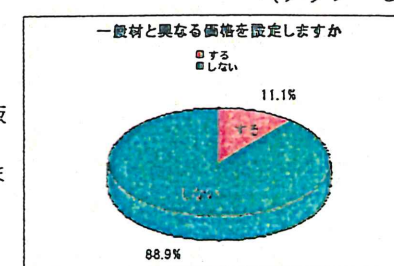
(グラフー2)



(イ) 設問-2 葉枯材を購入する場合一般材と異なる価格を設定しますか。

「する」が 2 社の 11 % で、「しない」が 16 社の 89 %、この結果から特別高値で購入する意志はないようである。

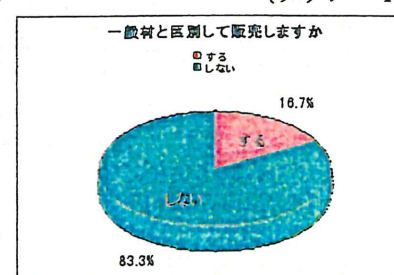
(グラフー3)



(ウ) 設問-3 葉枯材の製材品を販売する場合一般材と区別して販売しますか。

「する」が 3 社の 17 % で、「しない」が 15 社の 83 % となっており、ほとんど区別しないで一般材と混ぜて販売しているのが実態である。

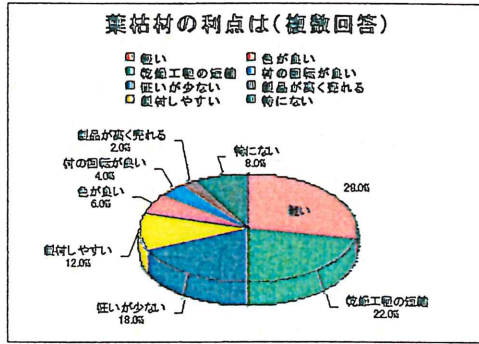
(グラフー4)



(エ) 設問-4 葉枯材の利点は何点だと思いますか。(複数回答)

(グラフー 5)

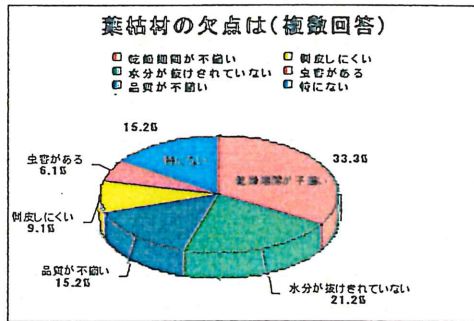
数多く出された中で一番多かったのが「軽い」の14社で28%、二番目は「乾燥工程が短縮できる」の11社22%、三番目は「狂いが少ない」の9社18%の順になった。



(オ) 設問ー5 葉枯材の欠点はどんな点だと思いますか。(複数回答)

(グラフー 6)

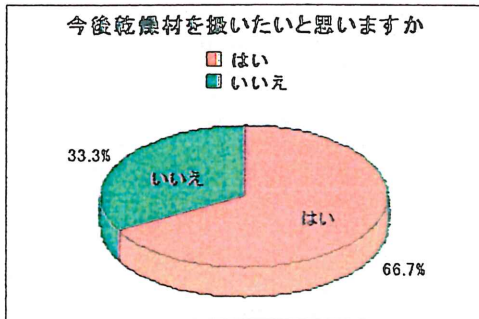
一番多く出されたのが「乾燥期間が不揃い」の11社31%、次に多かったのが「水分が抜けていない」で9社26%、三番目は「品質が不揃い」で5社14%の順になった。



(カ) 設問ー6 今後葉枯材を扱いたいと思いますか。

「はい」が12社の67%、「いいえ」が6社の33%であった。この結果からも葉枯材の需要はあるものと判断できる。

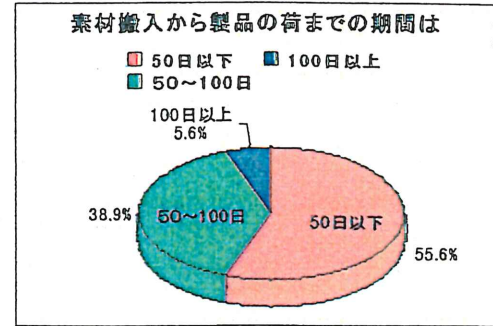
(グラフー 7)



(キ) 設問ー7 通常、素材搬入から製品出荷までの期間は何の程度ですか。

(グラフー 8)

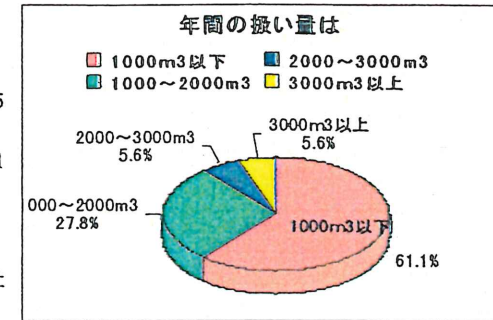
「50日以下」が10社で56%を占め、「50日～100日」が7社の38%、「100日以上」が1社の6%で、製品出荷までの平均期間は45日である。



(ク) 設問ー8 年間の扱量はどのぐらいですか。

「1000m3以下」が11社で61%を占め、「1000～2000m3」が5社の28%、「2000～3000m3」が1社の6%、「3000m3以上」が1社の6%で、年間取扱量の1社当たり平均は850m3と極めて少量である。

(グラフー 9)



(3) 葉枯材に対する要望

アンケート調査の中からいくつか要望が出されたものを列挙すると。

- ・安定供給してほしい。
- ・人工乾燥のコストを下げるため完全に乾燥させてほしい。
- ・含水率を明示してほしい。
- ・完全に仕分けして販売してほしい。
- ・葉枯材を今後もどんどん実行してほしい。

など、切実な要望が出されている。

2. 考察

今回の追跡調査は地元業者に限定したため一般的に判断することは危険であるが、葉枯材を差別化していない理由としては、欠点として指摘された乾燥期間が不揃いのため、水分が抜けきれず、しかも、品質が不揃いであることが上げられるであろう。一般材と区別して有利販売を目指すには、葉枯材の安定的持続的供給を考慮し、品質の良い林分での実施とあわせて、それぞれに含水率を明示することが求められている。幸いにして、葉枯材は軽くて狂いも少なく、人工乾燥の期間が短縮になるため、資金の回収も早まるという意見も多く寄せられている。それに、設問一6で葉枯材の扱いを希望する業者が多いというのも心強い。

今後は国有林として製材業者が最も頭を痛めている、乾燥コスト軽減に貢献するためにも葉枯材の生産は不可欠であると考える。

おわりに

本課題は平成7年～平成9年の3年間にわたり、生立木における含水率及び処理期間による含水率の推移を調査するとともに、心材部と辺材部の含水率の差異、年輪幅及び地上高との関係について調査し、解明に努めてきたところである。

含水率の推移関係については、平成7年度青森営林局業務研究発表会において発表した。

引用文献

増川 亨, 1989, ヒバサンドライの試験調査について, 平成元年度業務研究発表収録: 155-166 青森営林局, 青森

野々田 登典, 鈴木 直之, 三重県におけるスギ葉枯らし試験結果 (1) 研究報告第9号: 1-9 三重県林業技術センター, 三重